

空手道詳説（7）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略

これまで、標題を「沖縄史の時代区分」としてきたが、記述を進めるうちに矛盾が出てきた。そのため、今回から「沖縄史の概説」と改めることをお許しいただきたい。

(7) 元の襲来



フビライ・ハーン肖像画

モンゴルの遊牧民諸部族を一代で統一、最終的には世界人口の半数以上を統治し、人類史上最大規模のモンゴル帝国を築き上げたモンゴル帝国初代皇帝のチンギス・カン（1162～1227年）の孫で、モンゴル帝国の第5代皇帝に即位したクビライ・ハーン（1215～94年）は、1271年から1368年まで中国とモンゴル高原を中心に広大な地域を支配し、大元（以後、単に「元」と称する）を国名として近隣諸国を侵略し、支配下に置く礎を築いた。

元は、大挙して船団を組み近隣国を侵略するために遠征する。このことを元寇（げんこ

う）といった。元寇とは、当初からあった言葉ではなく、徳川光圀（1625～1701年、常陸国水戸藩第2代藩主）が編纂した「大日本史」が初出で、「寇」の字は「外から攻め込んで荒らす賊」の意味である。

日本では、鎌倉時代の「文永の役」（1274年）と「弘安の役」（1281年）の二回元寇の来襲を受け、国を挙げ総力をもって立ち防衛に立ち上がり、蒙古軍と当時その属国

であった高麗国による大船団の攻撃に立ち向かい、『蒙古襲来、国難来る』と高まる気運の中で国家の命運を掛けて防戦した。やっとのこと防衛を果たしたことは、歴史書の中に必ず出てくる大事変である。

特に二回目の弘安の役においては、派遣された艦隊は「世界史上最大規模の艦隊」といわれ主に九州北部が戦場となったが、これを撃退することに一定の成果を挙げ、更に元軍船団は台風による激しい暴風雨に遭って壊滅状態となった。

しかし、この二度の侵略侵攻において、朝鮮半島に近い対馬や壱岐などの島々が攻撃的となり、大きな犠牲を払っていることも無視できない事実である。

もしや、この元寇の戦いで敗れていたら日本はどうなっていたのだろうか。後々まで影響を及ぼしたであろうことを思えば、祖国のために戦った我々の先祖に対し敬意を表し感謝の念に堪えない気持ちである。

琉球に対する侵攻は、(6)で述べた太陽の子英祖の時代であった。

元は、日本との戦いに敗れた後の1291年、琉球に対して朝貢（朝貢については次の項で述べる）を要求してきた。琉球がこれを拒否すると討伐軍の派遣を決め、1297年実際に侵攻したが、琉球人たちは力を合わせ防衛に努め果敢に戦い、結果、元軍は如何ともし難く島民100名余りを捕虜にして帰還した。翌年、その捕虜を返還し服属を勧めてきたが、琉球はこれも拒絶している。

当時の琉球国民（沖縄本島）は、推定だが7万人は超えていなかったと思われる。しかも鉄製の武器は日本から輸入した僅かなものであり、日本侵略に失敗した元の戦力低減はあったとしても、いかなる戦術をもって元軍との戦いを勝利に導いたのか驚嘆に値する出来事であった。

元は、日本の北部においては、アイヌ民族に対し9度にわたる攻撃を仕掛け、1308年になってついに服属させ、以後は毛皮を貢納させている。

(8) 三山分立の時代

英祖王統第四代の玉城（たまぐすく、1296～1336年。在位1314～36年）は、1314年に即位したが、彼は酒色を好み、狩猟や道楽三昧の生活を送り政務を顧みなかった。このため周辺の按司や人民の信頼を失い、それが起因となって「世の主」（按司の中の按司）を名乗る者が沖縄本島の北部と南部に現れ、玉城王の中山と、北山、南山に分立してしまった。即ち、南部島添大里の承察度（うふざと）按司、北部今帰仁（なきじん）の帕尼芝（はにじ）按司である。この頃の琉球は、互いに領地の奪い合いで争い事が絶ない戦国時代といえる。

1336年に玉城王が41歳で亡くなると、玉城の子で西威（せいゐ。1328～49年、在位1337～49年）が王として後を継ぐが、未だ10歳という若年であったため、母后が政権を握ることになった。その専権は世の乱れの元を作り、王統の権威は地に落ち、臣下から人民に至るまで西威王以外の人物に注目し始めたという。「中山世鑑」は『牝鶏政を乱す』（ひんけいまつりごとをみだす）と記している。

西威王が僅か22歳で世を去ると、母后もやがて何処へともなく姿を消し、ここに英祖王統は消滅する。

この時代もう一つの特徴として、三山の各王がそれぞれ権勢の安定を目論むとともに、勢力の拡大を図り、領内の支配体制を強固に保とうと必死になっていた時期で、それでもなかなか安定を得るに難しく乱世の様相が現れていたのである。

日本でいえば南北朝時代の1350年、人民の期待に応え英祖王統に代わって中山の王となったのは、宜野湾生まれで高德の浦添按司・察度(さつと、1321～94年。在位1350～94年)であった。

察度は、浦添謝名(じやな)の奥間大親(おくまうふや。大親とは、按司の中でも「世の主」となり得る有力者のこと)と、天女羽衣との間に生まれた子であると「中山世鑑」に記されている。その物語りとは次である。



三山分立時の勢力分布図

後に奥間大親と呼ばれた察度の父は、家が貧かったため妻を娶る余裕もなく貧農の暮しであった。

田を耕して帰るある日のこと。森川という泉水のほとりを通り掛ると、泉で見かたことのない美しい女性が水浴をしていた。不思議に思って木陰から覗いていると、側の木の枝に衣服が掛けてあって、今まで見たこともない衣服の美しさに唾然とした。

大親はひそかに衣服を草むらの間に隠して泉の方に向かったところ、女は驚き慌てて泉から上がり、木の枝に掛けてある衣のところに走った。ところが、着物がなくなっていたので顔を覆って泣いた。

大親は『あなた何処から来たのですか』と尋ねると、『私は天女です。下界に降りてこの泉で水浴していたのですが、飛衣を盗まれてしまい天に帰ることができません』と言うのです。大親は『私が探してあげましょう。見付かるまで私の家で休んでください』と連れてゆき、飛衣は物置の奥深く隠してしまった。

歲月過ぎる中で、二人の間に姉弟の一女一男が生まれた。10年ばかり過ぎたある日のこと、姉娘が歌った一言がきっかけとなり、物置の奥から飛衣を発見した天女は、それを身にまとい天上に舞い上がった。

大親と二人の子供は天空を仰ぎ、声を放って泣いた。天女もまた地上に残った家族が捨て難い思いで飛び上がり飛び下がりしたが、やがて空の彼方に飛び去った。

その男子が察度である。

天女とは、仏教の世界観の中で神々や天人が住むとされる最上位の天上界において、天帝などに仕える女官で、羽衣と呼ばれる衣服を着けて空を飛ぶとされる。

天女が、羽衣を奪われたばかりに天空に帰れなくなり、地上の男性と結婚する物語は「羽衣伝説」と呼ばれて、日本では北海道から今回の沖縄、察度生誕まで、各所に存在する。東南アジアや中国にもこの種物語は多く残されている。

民俗学上からは、渡来人説から異類婚姻譚（人間と違う種類の存在と人間とが結婚する説話。中でも統治者に都合の良い始祖伝説に多い）に至る。日本なら謡曲「羽衣」に謡われる三保の松原（静岡県静岡市清水区）を舞台とする物語が有名である。

何故「中山世鑑」に察度生誕説として記載されたのだろうか。

筆者が察するに、察度の父奥間が大親と呼ばれる前、自分自身と才能豊かな息子察度とを語るに、尋常でない出自をもって箔をつけるために自ら吹聴したのでないだろうか。

成長した察度は、強い意志をもって人心の掌握に努め、強勢を誇っていた勝連按司の娘を娶って家運を起し、30歳のときに英祖王統を滅ぼし察度王統を樹立した。

着位して後、英祖王統の金蔵を空け、蔵から出した金銭をもって武器や農具に必要な鉄を購入し、鉄器を農民や貧窮者に与え救済したといわれる。

(9) 明の建国と朝貢のはじまり



洪武帝画像

現在の安徽省鳳陽県の貧農の家に生まれた洪武帝（1329～96年、在位1368～98年）は、1368年に元を北方へ駆逐して明国を建国し、初代皇帝となった。

明は中国の歴代王朝の一つであり、明朝あるいは大明と号した。

洪武帝は、建国の翌年（1369年）安南やジャワなどの南方諸島、高麗（朝鮮半島）、そして日本（室町時代初期）へと使者を派遣し朝貢を求めてきた。

朝貢とは、相手国の王に対して貢物を持参して従属の意を表することである。中国では、歴代の皇帝が執った伝統的な国交政策の一つである。

具体的には、中国皇帝に対し周辺国の君主が貢物を捧げ、これに対して皇帝側が恩賜の物資を与えるという形式である。

る。

周辺国が貢物を捧げることを進貢（しんこう）と、皇帝がその貢物を受け入れることを入貢（にゅうこう）とって、これをもって中国は従属国に対し威儀を保ち影響力を持つ形式が成立する。

しかし、一面では「朝貢貿易」といわれるように特産品を持参する周辺国に対して、中国は入貢品に倍する物資を与えるのを常としていたため、進貢側にとって悪い遣り取りでなかったはずで、これによる利も少なからず伴っていた。

日本に対しては、1369年に『東シナ海沿岸で略奪行為を行う、倭寇の鎮圧を日本国王に命じる・・・』という国書を持った使者・楊載が訪れ、懐良親王（かねながしんのう、1329～83年）にもたらされた。懐良親王とは、南朝・後醍醐天皇の第16皇子で征西大將軍という地位にあって、肥後国隈府（熊本県菊池市）を拠点に征西府の勢力を広げ、九州における南朝方の全盛期を築いた人である。

倭寇とは、13世紀から16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸の沿岸部や東アジア諸地域において跳梁跋扈した海賊で、後に前期倭寇といわれたこの時期は、日本人に一部高麗人が加わって構成されており、密貿易も行う集団で海乱鬼（かいらぎ）と呼ばれ恐れられていた。

明の使者がもたらした国書は極めて高圧的な内容で、『倭寇を放置するなら明軍を遣わして海賊を滅ぼし、「国王」を捕える』内容であったため、不快感を露わにした懐良親王は、国書を届けた使節団17名のうち5名を処刑し、楊載ら2名を3か月間勾留し、国書の無礼を咎めてこれに応じなかった。威風を誇る新生国の明を恐れ、ほとんどの国が朝貢に応じたのとの違いである。

しかし、日本と明との関係は、足利義満（1358～1408年。室町幕府第三代将軍、在職1368～1394年）の時代になって進貢船を送り、日明貿易を開始している。

琉球に朝貢を促す招諭の国書が届いたのは日本より3年遅れの1372年で、中山王の察度に対してであった。元の時代には「瑠求」と国名を記されていたのが、明では「琉球」の字をもって宛てられた。これが国名琉球の始まりとなった。

察度は、同年秋に弟の泰期を明に遣わし、臣と称して貢物を献じ、明と琉球の公式国交が始まりになったばかりか、琉球が国際史上に正規に登場する最初となった。

明は朝貢を受けた国に対し王号を与え王の印文を刻んだ鍍金（ときん。メッキ）銀印を送り冠服を下賜するが、その意味は、周辺防衛の任務を負荷されたことである。

以降中山は、莫大な利益を当て込んだ朝貢使節を毎年のように派遣するが、北山、南山ともにこれに倣い使節を送り、山南・山北の王として冊封（さくほう）されている。

冊封とは、朝貢によって恭順の意を表した国に対し、『汝を封じて・・・国の王となす』という勅書を与えて服従を命じることで、任命書の他に印章などの授受を媒介とし、中国の天子と近隣諸国の長（王）が取り結ぶ君臣関係を伴う外交の一種である。

なお、天子とは「天命を受けて自国のみならず近隣の諸国を支配教化する使命を帯びた君主」の意味を持つ。

冊封が宗主国側からの行為であるのに対し、朝貢国側は臣（配下統治を受ける者）の名義で産物を献上し、中国の元号を用い、制定された暦を使用する義務を負う。

この冊封は冊封使によって伝達され、冊封使の乗る船を御冠船（うかんしん）と呼んだ。最初に冊封使が来琉したのは察度の子で察度王統第二代王となった武寧（ぶねい、1356～1406年。在位 1396～1406年）時代の1404年で、以降、大方の国王交代（即位）に伴って遣わされ、琉球最後の国王・尚泰（1843～1901年）の代まで続く。

察度は1396年に亡くなり、その後を察度の子・武寧（1356～1406年、在位 1396～1406年）が即位する。しかし、武寧は人民の信望を集め得ず、後に第一尚氏王統といわれる尚思紹（在位 1406～1421年）、巴志（在位 1421～1439年）親子の来襲を受け、武寧の部下が尚氏に味方するなど戦いに敗れ、居城である浦添城から退散した。

尚巴志は1416年に北山を討伐し、1421年父思紹の死によって中山王に即位。1429年には南山を滅ぼして三山を統一し、浦添から首里に居城を移す。

後に、第一尚氏王統といわれる統一王統を成立させた。

三山時代の間、明に朝貢したのは中山が42回、北山が11回、南山が24回と記録されている。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月初版、日本放送出版協会発行
新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月初版、株勁草書房発行